

エコロジー思想からみた動物園

石井美奈

本論文は、筆者が動物園に対して覚える違和感を解消すべく、「エコロジー思想」との関連から「動物園」を考察していくものである。ここでいう「エコロジー思想」は、「生態学」という学問的な意味を超え、「人間やその過剰な活動が、自然が本来持っている自律的調和的なシステムの最大の破壊者とみなし、それを見直していこう」とする環境保護としてのイデオロギー的言葉として用いている。筆者の抱いた違和感はこの「エコロジー思想」の影響からくるものではないかと仮定し、その関係性に焦点を当て調査した。

本論では、はじめに、「動物園」の定義、古代に端を発する「動物園」の歴史やその時代による機能の変化、そして現代社会において人々がいつ何の目的で動物園という場所を経験しているのかを簡単なインタビューで探り、「動物園」とはどのようなものかを見ていく。次に「エコロジー思想」とは何か、まずは定義を明らかにし、その上で「エコロジー思想」の成り立ちと世界規模での展開を見る。また「エコロジー思想」の影響を受けた「動物園」がどのようにその中身を変えてきたのかを、組織や戦略、国際法、国内法などを交

えながら整理していく。そして、現代の動物園の現状に触れ、三つの動物園（恩賜上野動物園、多摩動物公園、よこはま動物園）を例に挙げ、動物園関係者に聞き取り調査をした結果を載せる。

古代において特権階級の所有物であった動物園は、市民革命後に学問目的・一般公開という性質を持つようになる。そして、産業革命の結果、自然破壊が進み「エコロジー思想」が出現したのを受け、本来ならば「エコロジー思想」と対極の存在である「動物園」が自らその思想を飲み込み、「種の保存・環境教育」という役割を強調し掲げるようになった。現代の日本の動物園はその認識のされ方が娯楽的なものであり、費用や組織的な問題から、進んだ取り組みがしづらくなっている。また、指定管理者制度を取り入れる動物園は、人やコストの点で、運営の中身が厳しいものになってくる。しかしながら「エコロジー思想」はこれから益々強調され、それに伴い「動物園」に対する役割は大きくなるだろう。今は「動物園」のいわば転換期であり、これから「動物園」の「種の保存」等への取り組みのアピールと研究調査機能の発展が期待される。

本格焼酎ブームの実体と業界変化 ——宮崎県をモデルにして——

大谷美穂子

長年に渡り、本格焼酎は南九州と一部の地域の地酒として存在してきた。生産地と消費地は一致しており、その他の地域では、焼酎は日本酒と比べて低級な酒であるとみなされ、あくまで一般的な酒ではなかった。しかしながら、1970年代に起こった焼酎ブームから30年を経て、現在第二の大きな本格焼酎ブームがおきている。

本研究では、過去の本格焼酎ブームの経過と、本格焼酎の一大産地としての宮崎産本格焼酎業界を併せて調査・考察し、2000年以降の本格焼酎ブームの実態と、ブームがどのようにして起こっ

たのか、そして本格焼酎の大幅なイメージ転換がどのように起きたのかを考察した。

2000年以降の焼酎ブームの実態に関して、統計調査と過去30年にわたるブームの変遷をたどることにより、大手酒造メーカーが主役だった過去のブームと異なり、中小酒造の、特に「いも焼酎」がブームを牽引していることがわかった。

本格焼酎の一大産地である宮崎県の酒造を取材調査することで、宮崎の焼酎業界の事情が明らかになった。それは、地元において大手酒造メーカーが中小酒造を圧倒しているという現状である。

また、中小酒造が都市部へ進出した際に、都市部にある個人経営の酒販店が大きな役割を果たしたことが明らかになった。規制緩和のため、資本を持たない小さな酒販店は、中小酒造と同様に大手の同業者に圧倒される厳しい立場にある。今回取材した酒販店では、グローバル化に対抗する手段として、大手ができない細やかなサービスと独自の品揃えに特化する道を選んだ。

中小酒造でも、消費者とより近い関係を築ける、また、情報の透明性が高い関係を維持できるとして、お互いの利害が一致したのである。この組み

合わせにより、酒造と酒販店と消費者の新たな関係性が誕生した。それは、「顔が見える」関係であり、これは一種のトレーサビリティであるといえる。

中小酒造と酒販店のタッグが先頭をきっていた今回のブームは、今落ち着きを見せ始めている。事実、本研究で現在進行形の現象を把握できたとは思えない。ブームの凋落がどこまで進むか実際にはわからない状態である。なので、今後もブームの行方を本稿の続きとして追及していきたい。

日本アニメ研究

「ジャパニメーション」に描かれた社会空間の変遷—

鎌 野 幹 子

本論文では、日本アニメの中に描かれた社会空間の変遷について述べる。

最初に、今日「ジャパニメーション」として世界から称賛を受けるまでに成長した日本アニメが、もともとは日本でどの様にして生まれ、どのようにして発展してきたのかを、大正時代にまでさかのぼりその歴史を追う。初期は米国の技術を研究してどうにか真似ることだけで精一杯であった日本アニメだが、追いつけない部分は、日本独特の世界観や、複雑でおもしろみのあるストーリー、また器用の操作する撮影技術で補うなど、様々な工夫を凝らしながら、独自の方法で良質のアニメ制作を目指すうちに、最終的には世界に誇れる優れた文化へと大きな成長を遂げたのである。

日本においてテレビアニメの放映が開始されたのは1963年。続いては、その年から、長期間放映されたアニメのみをピックアップし、約10年

ごとに一つの年代作品としてまとめるという作業をする。そしてその個々の作品において、登場人物、内容、空間という三つの項目を書き出し、こういったタイプの作品であるのかを明らかにしていく。その上で、それぞれの年代において作品の内容にどのような特徴があり、また登場人物、内容、空間というアニメの中の社会空間がどのような形で描かれているのか、またそれぞれの時代においてアニメが描き出そうとしているものは何か、訴えようとしていることは何であるのかという点に焦点をあてて分析を進めていく。

手塚治虫の「鉄腕アトム」から始まり、GAINAXの「新世紀エヴァンゲリオン」で締めくくられる社会空間分析。それぞれのアニメが描かれた時代背景、また作者の意図とそれがどのように結びついているのであろうか。1980年代生まれの私が持つアニメ感を通して考えて行く。

千葉県の上三河に見る市民活動の力

佐 光 幸 代

多様化、複雑化してきている今日の社会において、NPOが活躍する場はますます増えてきている。NPOと言っても、活動分野は多岐に渡っており一概には言えないが、本論文では特に「政治や自治体、圧倒的な力をもつ大企業などが進

める規定路線や公共事業に異議を申し立てる運動」として、上三河埋立計画をめぐる市民活動を取り上げ、NPOとしての可能性を考察した。対象地域は、千葉縣市川市、船橋市地先に広がる埋め残された海域、上三河（干潟や浅海域）で